

# 母語からの追放

## あるデルスィムの孤児たちの物語

磯部加代子

### I. 故郷と母語から引き裂かれて

デルスィムというのは、かつてトルコ東部に実存する町の名前だった。現在、地図上で見つけられるのは、「トゥンジェリ」というトルコ語化された地名である。本稿では、引用文で「トゥンジェリ」となっている以外は、「デルスィム」と表記する。

1937年から38年にかけてデルスィムでは激しい民族虐殺が起きた。デルスィムは、トルコ語が話されるトルコにおいてそれとは系統を異にするザザ語を話し、宗教も多数派のスナ派イスラームとは異なるアレヴィー派<sup>1</sup>が多数派を占める町である。キリスト教徒のアルメニア人も住んでいた。デルスィムの住民の反乱を政府軍が鎮圧したという説明がされてきたが、実際は、宗教と言語の観点から二重に少数派であるデルスィムの住民の抹殺を目論むトルコ共和国政府軍による異民族虐殺だった。しかし、そのことはトルコでは長らくタブー視され、語られることがなかった。2011年にデルスィムでの虐殺の記録文書が見つかり、これが契機となったのか、2012年以降、徐々に虐殺事件にまつわる様々な書籍が出回るようになった。

本稿で主に参照するのは、デルスィム出身の映画プロデューサーであるキャーズム・ギュンドアンと、エルズルム出身の映画監督ネザーハット・ギュンドアンの二人が発表した映像作品や書籍である。二人はデルスィムの虐殺について調査を進めていく中で、連れ去られた女の孤児<sup>2</sup>たちの存在に注目するようになる。二人が共同で制作した『デルスィムの行方不明の女兒たち ～女兒殺害～』<sup>3</sup>（以下、『行方不明の女兒たち』）と

---

<sup>1</sup> イスラームの一派で、第4代正統カリフのアリを神格化する。トルコでは、クルド人だけでなくトルコ人の間でも信奉されている。トルコの多数派であるスナ派とは教義の点で異なる部分が多く、そのことが差別の理由とされ、迫害されてきた。

<sup>2</sup> 本稿はサブタイトルにジェンダーを特定しない「孤児」という言葉を用いたが、本稿で論じるのは、女の孤児たちである。

<sup>3</sup> Nezahat Gündoğan, Kazım Gündoğan, *Dersim'in Kayıp Kızları "Tertelé Çêneku"*, İletişim Yayınları, 2012.

キャズム・ギュンドアンによる『修道士の孫たち』<sup>4</sup>を中心に見ていく。『行方不明の  
女兒たち』の出版に先立って 2010 年に制作されたドキュメンタリー作品「二掴みの髪  
～デルスィムの行方不明の女兒たち～」(以下、「二掴みの髪」<sup>5</sup>)では女兒たちの証言  
を映像として聞くことができる。

デルスィムの虐殺は、政府発表で約 13,160 人が殺され、11,818 人が故郷を追われた  
とされている<sup>6</sup>。ギュンドアンらの印象だと、実際の数字はこの 2 倍から 3 倍にのぼるだ  
ろう、ということである。虐殺について公に語られることがなかったように、女兒たち  
の連れ去りについても広く知られることはなく、また、女兒たちのほうも沈黙してきた。  
女兒の連れ去りは、トルコ政府による少数民族に対する同化政策の一環だった。1925 年、  
4 月 27 日付 *Vakit* 紙には、前年までトルコ共和国の初代首相を務め、のちに第 2 代大統  
領 (1938 - 1950) となるイスメット・イノニュの次のような発言が掲載されている。

祖国 (*vatan*) の大地に暮らす全ての者を、我々政府はトルコ人かつトルコ民族主  
義者にするつもりである。トルコ人とトルコ民族主義を受け入れない者は、組織的  
な形で切り落とす。<sup>7</sup>

デルスィムではそれまで、事実上の自治が行われていた。ザザ語を話すアレヴィー派  
や異教徒のアルメニア人は、ひとつの言語 (トルコ語)、ひとつの民族 (トルコ人)、ひ  
とつの宗教 (イスラーム) という理念に基づいて人工的に「祖国」を作り上げようとする  
新生トルコには目障りな存在だったに違いない。

イノニュが宣言した通り、デルスィムの人々は、切られ (虐殺され)、落とされた (追  
放された)。追放されたのは、主に女兒であったことがギュンドアンらの調査で明らか  
になっていく<sup>8</sup>。連れ去られた女兒たちは「養女」という名のもとに、ほとんど使用人の  
ように使われ、教育の機会も与えられなかったケースがほとんどであったことが証言か  
らわかる。だが、主に女兒が連れ去られたのは、単に使用人として使うためだけだった

---

<sup>4</sup> Kazım Gündoğan, *Keşiş'in Torunları*, Ayrıntı Yayınları, 2016.

<sup>5</sup> Nezahat Gündoğan, *İki Tutam Saç: Dersim'in Kayıp Kızları*, 2010.  
[https://www.youtube.com/watch?v=ta8Qvzo4i\\_0](https://www.youtube.com/watch?v=ta8Qvzo4i_0) (最終閲覧 2018/09/03)

<sup>6</sup> Nezahat Gündoğan, Kazım Gündoğan, *op.cit.*, p.24.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p.15.

<sup>8</sup> 一方、男児の処遇について証言から、虐殺があったときに殺された場合と、女兒のように追  
放された者たちがいたことが分かる。

のだろうか？ギュンドアンは、社会学者のフェルフンデ・オズバイの論考を参照しながら、「母の文化の継承者としての女兒を同化することには特別な意味があったのでは」<sup>9</sup>と推測している。トルコ人に同化した女兒から生まれた子はトルコ人である、という論法である。こうして、ひとつの言語（トルコ語）、ひとつの民族（トルコ人）、ひとつの宗教（イスラーム）は既成事実化されようとした。

しかし、本当に、国が目論む同化政策は「成功」したのだろうか？ギュンドアンらの作品に触れると、同化政策という物語とは別の物語が見えてくる。生き残ったことを恥じ入る女兒たちと、彼女たちが生き残った証である彼女たちの子供たちの、いずれも「トルコ語」で語られる証言を同時に読むことで、vatan なるものをめぐって何が明らかになっていくのか、論じていきたい。

## II. 行方不明の女兒たちについての調査研究

ギュンドアンは国連のジェノサイド条約の定義とデルスィムの虐殺の類似点をひとつひとつ照らし合わせている。国連の定義は以下のようなものだ。<sup>10</sup>

- a) 集団構成員を殺すこと。
- b) 集団構成員に対して重大な肉体的または精神的な危害を加えること。
- c) 全部または一部に肉体的破壊をもたらすために意図された生活条件を集団に対して故意に課すこと。
- d) 集団内における出生を防止することを意図する措置を課すること。
- e) ある集団の児童を他の集団に強制的に移すこと。

デルスィムの地で起きたことは、これらの定義のすべてに当てはまる。とりわけ最後の e) の項目は注目に値する。他の集団に強制的に移し、出自を忘れさせる、あるいは上書き保存するように別の言語、別の宗教、別の習慣を強制的に（多くの場合は暴力と共に）覚えさせることは、ジェノサイドと同義なのである。

デルスィム出身の女兒たちを「養女」にすること（実態はその言葉とはかけ離れていたようではあるが）の真の目的は、アレヴィー派、あるいはアルメニア人の子供たちを

---

<sup>9</sup> Nezahat Gündoğan, Kazım Gündoğan, *op.cit.*, p.25.

<sup>10</sup> *Ibid.*, pp.16-17.

スナ派のトルコ人に同化させることだった。

ギュンドアンたちは2007年から辛抱強くトルコ全土の、デルスィムから連れ去られたかつての娘たちへの取材を重ねたが、しかし、その取材の道は決して平たんなものではなかった。

ほとんどすべてのケースで前景化されたのは、沈黙と真実の隠ぺいでした。子供たちや配偶者にすら打ち明けることのない秘密……。もともとの身元を忘れ、あたらしいアイデンティティに適合するための彼女たちのドラマチックで人生を賭けた努力に耳を傾けるのは、簡単なことではありませんでした。<sup>11</sup>

「耳を傾けるのは簡単ではない」のは、話の内容が気安く聞けるものではない、という意味もあるだろうが、そもそも語ってくれない人が多かった、という意味も含まれているのだと思う。インタビューを申し込んで1年経ってようやく口を開いた人もいれば、最後まで拒んだ人もいる。それでもギュンドアンたちがあきらめずにこの厳しい聞き取り調査を続けたのは、揺るがない強い信念があったからだ。

今も血を流している歴史と社会の傷口を治療することなく、健全な社会で生きることが、未来を築くこともできない。傷ついた社会と個人に共感し、向き合い、人間に対して行われた罪を清算することが、人間の分別と良心に対して求められている。<sup>12</sup>

### III. 4人の孤児たちの証言

ここから4人の娘の証言をもとに、デルスィムから連れ去られた後の彼女たちの人生がどのようなものだったのか、具体的に見ていきたい。

#### 1. クルド人として生きたい フーリエ・アスラン（デルスィム、2008年）<sup>13</sup>

フーリエ・アスランは1938年当時8歳か9歳だった。両親はおらず、おじ一家のも

---

<sup>11</sup> *Ibid.*, p.19.

<sup>12</sup> *Ibid.*, p.20.

<sup>13</sup> (地名 西暦)は、現在の居住地とインタビューが行われた年を表す。

とでいとこたちや父方の祖母と共に住んでいた。おじを父とよび、おじの妻を母と呼んで育った。

フーリエが住んでいたのはデルスィム県オワジュク市のルズラック村。フーリエの記憶ではそれは「戦争」だった。一家は軍から逃げたが、フーリエは兵隊につかまり列車に乗せられ、黒海沿岸の町サムスンに連れて行かれた。そこである軍人の家にもらわれた。その家にはすでに娘が3人いた。雑務係の兵士がその女主人に命令される、「そのクルド人の子の食器をうちの子たちの食器と一緒に洗わないで」。

次にフーリエが住まうことになるのはシェケルジオール家。砂糖工場を持つ金持ちだ。その家の子供たちは学校へ行っており、フーリエも学校へ通って勉強したいと願い出るも「クルアーン学校に行かせてやる」とだけ言わる。結局、それすら叶えられることはなかった。

のちに、父方の叔母やいとこのケコことイスマイル・エルギンらがフーリエを見つけ出し、裁判の末シェケルジオール家を出ることができた。シェケルジオール家の主人は隙あらばフーリエにキスしたり、膝に座らせたりした。家を出ていくという段になると、暴力を振るうこともした。また、自分たちがお金をかけて育てたのだから渡せない、などとごねた。叔母は「いくらでも支払う、この娘を連れて行く」と強い態度に出た。

私はトルコ人にパンと水をもらって育ててもらったけれど、クルド人がいいんです。金持ちになるより幸せになりたい。<sup>14</sup>

フーリエはインタビューの中で繰り返し「クルド人と一緒に居たかった」と口にしていく。ザザ語はクルド語とは別言語であるという議論があるが、アカデミックな分類とは別に、ザザ語話者の個人レベルでは「クルド人」を自認している人も多いようだ。言葉が通じない人々（トルコ人）の間で差別されながらひとりぼっちで生きてきたフーリエにとって幸せとは、おのずと、「同じ民族＝言葉が通じる相手」と共に生きること、クルド人として、クルド人とともに生きることだった。結婚相手もクルド人を選んだ。

『行方不明の女兒たち』では、シェケルジオール一家の娘の一人の証言を読むことができる。600ページある同書の中でも珍しく笑顔の人物なので、目を引いた。デルスィ

---

<sup>14</sup> Nezahat Gündoğan, Kazım Gündoğan, *op.cit.*, p.71.

ムの女兒たちの証言、そして、深く刻まれた元女兒たちのおばあさんたちの皺の深さと比べると、ずっと手入れの行き届いた顔や、ためらいのない流暢なトルコ語の証言を読むことで、いかに、故郷と家族と言語と文化から引き裂かれた女兒たちが、寄る辺のない、不安定な存在だったかを伺い知ることができる。

家に来たときはフリーエ姉さんはトルコ語を知らなかったんです。私たちも小さかったですけどね。それはそれは夢中になりましたよ。カールした髪の毛、どんなにか素敵な髪の毛だったか……。私たちは、すぐに彼女のことが好きになりました。「フリーエ姉さん、フリーエ姉さん」と周りを囲んだものです。私たちみんなで彼女にトルコ語を教えたんですよ。母は、刺繍の手ほどきや、家事を教えていました。きちんと育てていましたよ。<sup>15</sup>

フリーエの語りは自らの感情を伝える繊細さはあるが、ところどころ事実について説明不足で、唐突な展開のように感じられる箇所がある（いとこのケコもまた、故郷を追われ、教育の機会にはあまり恵まれなかっただろうが、ケコの証言があることで辻褃合わせをすることができる）。たとえば、子供が生まれた、というくだりの数行後には、夫（デルスィム出身者）が、(おそらく)移民労働者としてドイツに行ったことが語られる。息子が生まれたという話の数行後だが「嫁が二人」と語り、一体誰の嫁なのかと混乱する。

主人はドイツに行って1年働いて、休暇に戻ってきた。行ったときは嫁が二人いて、私たちは一緒に散歩した。戻ってしまって泣いた。……(ドイツに)行ってからもう戻らなかった。脳出血をおこしたって聞いた。招待状が送られてきたから行ってみようということになった。イスタンブルに着いたとき、訃報が届いた。それで私は戻った。<sup>16</sup>

若い娘らしいことがひとつもできなかったフリーエは、サムソンの町で娘たちがしているようにおしゃれがしたかった、という。本ではモノクロでわからないが、映像作品

---

<sup>15</sup> *Ibid.*, p.75.

<sup>16</sup> *Ibid.*, pp.71-72.

のほうでは、ピンクのチョッキと花柄のスカーフが大きな愛らしい瞳に映えていた。

## 2. 弟との再会 ファトマ・イチン（アドゥヤマン、2008年）

ファトマ・イチンは、フーリエ・アスランのいところにあたる。彼女もまた、故郷デルスィムからエラズーへ連れて行かれ、そこからマラティア出身の軍人の家にもらわれた。トルコ語はまったくわからなかったが、「クルド語を話したら殺す」と言われ、トルコ語を仕方なく学んだ。実際に話していたのはザザ語なのだろうが、そのあたりの区別は話者ですら曖昧である。かつて、夫にも子供たちにも自分の出自を隠していた。それは、

テレビでトゥンジェリ<sup>17</sup>が混乱しているのを知って怖かった。子供たちが事件に巻き込まれるようなことがないようにって黙っていたわ。トゥンジェリのことはいつも野蛮なところとして知られていたから。<sup>18</sup>

実際には、隠していた、というより、歳の離れた夫は妻がデルスィムの出身であることを知っていた。知っていたのだが、関わりたくなかったのかもしれない。

（夫は）一度も聞いたことはないわね。「おまえは母親もいなけりゃ父親もない、何者なんだ？」なんて一度たりとも聞いたことはないんだよ。私のほうも、夫の前で話したことはないけどね。あるとき、ラジオで「行方不明者は名乗り出よ、捜索中である」なんて言ってた。それで私も言ったんだよ「行方不明者を探しているんだって」と。夫は「おまえになんの関係がある？じっとしてりゃいい」って。夫は知っていたのね、そりゃあもう間違いなく知っていたに違いないわ。私に言わせなかっただけよ。<sup>19</sup>

いきさつはわからないが、子供たちにデルスィム出身であることが知られることとな

---

<sup>17</sup> 娘スドゥカの証言では、「(母) デルスィムって言うんです。義理の兄オスマンが、デルスィムはトゥンジェリという新しい地名になったんだと言いました。母は、トゥンジェリなんて知らないんですよ。読み書きもできないし」ということなので、ここで、ファトマが「トゥンジェリ」と発言しているのは、政治的な判断なのかもしれない。(ibid., p.87.)

<sup>18</sup> Ibid., p.83.

<sup>19</sup> Ibid., p.83.

り、子供たちの尽力により、デルスィムまで身内探しの旅に出ている。デルスィムで「ブルサにあなたの親戚がいる」という情報を得て、電話番号をもらう。こうして、生き別れの弟、ハサン・エルギンと再会を果たすことができた。しかし、弟はアレヴィーのままだった。ファトマはスンナ派に改宗していた。

弟たちと会った時、私は礼拝（namaz）は一度もしなかったの。よく思わないかもしれないと思ったから。<sup>20</sup>

ファトマがこのように弟に「気を遣う」のは、自分がすっかりスンナ派に同化してしまったことの後ろめたさのためだろうか。母が実の弟と再会したことを受けて、娘のストゥカ・イチンは次のように語っている。

私たちにとって一番の大きな幸せは母の幸せです……。母に幸せになって欲しいと思っていました。母が幸せになって、私たちも幸せです。おじさんがいるというのも、とても素晴らしい気持です。<sup>21</sup>

ある程度の年齢になると「自分の起源を知りたい」という好奇心に満ちた年頃というのがある。どうして母親には誰も身内がないのか？と、自然と湧き上がってくる疑問だろう。娘や息子たちも、自身が安心して幸せになるためには、母親の幸せな姿を見ることが大事だった。いつも何かを内に秘め生きにくそうだった母だったが、息子曰く「弟に再会してから十歳は若返ったようだ」という。

一方で、ファトマにも当然、母がいた。弟は母といっしょに避難した。姉を探さなかったわけではない。1938年に行方不明になった姉を探していると、新聞に人探しの広告を載せようとしたこともある。当時彼はドイツに居た。新聞からの返事は、「それはできない」だった。母もずっと娘のことを思っていたが、会えないままあの世へ旅立った。

ドキュメンタリー作品で見ても、ファトマのトルコ語の聞き取りにくさは顕著である。彼女のトルコ語は、すでに習得された母語の上に強制的に上書きされたものだった。

---

<sup>20</sup> *Ibid.*, p.84.

<sup>21</sup> *Ibid.*, p.89.



### 3. 兄の血の匂い エモシュ・ギュルヴェル (イスタンブル、2011)

エモシュ・ギュルヴェルは1933年生まれだが、結婚するときに実年齢より年上に見せるため、1929年生まれと登録されている。1938年には5歳程度ということになる。父と母の名前も覚えていない。兄と弟がいたことは覚えている。だが、誰の名前も覚えていない。

母と父の名前は憶えていないねえ。IDカードを取得したときに、フセインとハティジェって書いてあったよ。兄が一人いたし、弟も一人。名前は憶えていないよ。父のことは憶えているけどね、なんとなくだけど。……それから、事件が起きた。何がどうなったか、憶えちゃいないんだよ。なんでもかんでも憶えているんだけどね、そこだけ憶えていないんだから、どうなっちゃてるんだろうね。<sup>22</sup>

人の記憶はどんなふうに切り取られるのだろうか。あるいは再構成されるのだろうか。記憶は「今の私」の都合で書き換えられることもある。しかし、怪我をした兄と月夜の中逃げたときの兄の血の匂いを、エモシュは今も覚えている、という。消えない五感にこびりついた記憶。

子供の考えでは、逃げると言ってもどう逃げていいのかもわからず、結局エモシュは自宅へ向かったのだった。そこで、軍に捕まってしまう。そのとき彼女を捕まえた軍人たちの一人でエルズルム出身のイスタンブル在住の軍人が彼女の養父となる。養父と養母は優しかった。結婚相手は15歳年上の鉄道会社勤務。暴力はひどかった。娘一人、息子一人。インタビューの行われた2011年当時夫は亡くなり、娘のもとで暮らしている。

エモシュには、デルスィムでの出来事について否定的な思いがない。それどころか、エモシュは完全にスンナ派のトルコ人に同化している。

トルコ人がトルコ人を殺すなんて。見たことがある？こんなことがあるかしら？でも、どうしようもない、きっと、アタテュルクを怒らせるようなことをしたんでしょうよ。<sup>23</sup>

---

<sup>22</sup> *Ibid.*, p.501.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p.502.

私はトルコ人だし礼拝もする。50年間ずっと礼拝を怠ってないもの。『クルアーン』も読む。私がアレヴィーだなんて、そんなこと承知しませんよ。私は自分をトルコ人だと思っているわ。(実の)両親がなんだったかなんて私は知らないわ!アッラーに感謝します、私はムスリムです。<sup>24</sup>

養父母からの虐待などもなく、すでに子供がいたにも関わらず養女として引き取ることと同意した養母の人柄もあって、今の自分への肯定感が強いように思われる。

一方で、実際に殺されたときの「兄の血の匂いを覚えている」とも証言している。このような経験があるのに、トラウマになっていないように見受けられるのが、どこか不自然な気がする。うがった見方をすると、同化してトルコ人として生きていくことで、幼少時の記憶の意味を書き換えていったのではないだろうか。もちろん、自分が安心して生きていくために。

養父母一家が軍人なので、赴任地が変わるごとにあちこちに引っ越した話が続くのだが、最後に、

私は彼ら(養父母一家)とは別々になったんです。「お母さん」のお兄さん、お父さんの家に住んでいました。そんなこんなで成長しました。他には特にはないです。<sup>25</sup>

この部分がとても唐突に感じられる。この唐突さ、彼女の語りを読んでいて感じる違和感が、娘の話を読むことではっきりとしてくる。娘のS.T.は1956年イスタンブル生まれ。母親の出自については周囲の人には明かしていない。家族だけの秘密である。なぜなら、トルコ社会でアレヴィー派であることをカミングアウトするには不安な要素があるからだ。同化トルコ人の母から生まれた娘であるS.T.は、共和国の娘である。

祖国解放戦争をしてトルコ共和国を建国した尊敬すべきリーダーたちが、殺す必要があると判断したのなら、その殺される側のグループには何らかの問題があったのではないかと思っています。<sup>26</sup>

---

<sup>24</sup> *Ibid.*, p.506.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p.505.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p.507.

このように、エモシユの娘は国の政策という大きな物語を否定することはないが、養父母の育て方という小さな物語には大変否定的である。母親が「養女」とはいえ、現実には実子たちより下の扱いをうけてきたとあって、「祖父母」への心象はかなり悪い。また、よくある、「ご出身はどちら？」という質問に対し、

「両親共にエルズルム出身です」と答えました。3、5年前ぐらいから、「母はトゥンジェリ出身です」と言うようにしています。一時期は疑問視されていましたが。エルズルム、エズインジャン、トラブゾン、リゼ<sup>27</sup>、と言え、何も問題はなけれど、トゥンジェリとなると問題です。<sup>28</sup>

過去に行われた同化政策という暴力を宿したまま生きることを余儀なくされた、連れ去られた女兒とその子孫の言葉は、同化政策が過去に一度だけ行われたということではなくて、今なお継続していることを伺わせる。

#### 4. アスルハンとして生を受け、ファトマとしてこの世を去る

アスルハン・キレミッチャン（ファトマ・ヤウズ）（ウスバルタ、2012）

ギュンドアンがデルスィムのアルメニア人について調査を続けていく中で、アルメニア人の有力者である修道士一族に焦点を当てていくことになるのだが、アスルハン・キレミッチャンはこの修道士一族の出だった。<sup>29</sup>

家族と離ればなれになり故郷を追われたとき、アスルハンはごく幼かった。自分の話していた言語が何語であったのか、民族的出自や宗教的背景はもちろんのこと、村に教会があったことすら覚えていない。覚えていたのは大きな胡桃の木と畑だけ。自然と戯れる機会が多かった幼い子供にとって、それはとても当たり前のことのように思える。

父方の叔母と彼女の三人の息子たちと一緒に、トルコ中部の町、コンヤ県のベイシ

---

<sup>27</sup> エルズルムとエズインジャンはトルコ東部の町、トラブゾンとリゼは黒海地方の町の名前。トルコ西部は開発の進んだ政治経済の中心地が集中しているが、開発の遅れた東部や黒海の町であっても、その町の名前が人々に葛藤を生じさせることのない町の名前、という意味で列挙されていると思われる。

<sup>28</sup> Nzahat Gündoğan, Kazım Gündoğan, *op.cit.*, p.513.

<sup>29</sup> 関連映像作品としては、「修道院の子供たち」Vank'ın Çocukları (The Children of Vank) がある Vank とは、アルメニア語で修道院の意味。それがそのまま村の名前となっている。Keşiş'in Torunları, Ayrıntı Yay., 2016. p.20. 注釈より

ェヒルに連れてこられて、息子たち三人はここで割礼をされムスリムとなった。その後、叔母たちとは離れ離れとなり、アスルハンとはある軍の大佐のところへ養女となり、よくしてもらっていたが、一家の転勤についていく許可が下りず、やむを得ず役所の戸籍化の役人一家に養女としてもらえることになる。この役人の家では大変な苦勞を強いられた。料理や家事をやらされ、女中扱いである。寝室すらなく外で遊ぶ時間も与えられなかった。9歳から10歳までこの家族のもとで過ごした。

彼（ら一家が）私を育てたの。殴ったりなんかしながらね…。小説よ、yavrum、小説そのもの……。<sup>30</sup>

アスルハンの語りはとても特徴的だ。トルコ語では、話し言葉の中で、相手呼びかける場合が往々にしてある。英語に置き換えるなら、Canım（ジャヌム）は My heart、Kızım（クズム）は My daughter、Oğlum（オールム）は My son、Yavrum（ヤウルム）は My baby といった具合だ。アスルハンのもっぱら、Yavrum を多用する人のようだった。

のちに別の家庭にもらわれ、そこで2、3年過ごす。この家から12歳で30歳ほどの男のもとへ嫁ぐこととなる。このとき、信仰告白をさせられムスリムになったという。このあたりの説明はアスルハンの話し方だと曖昧だが、のちに娘のゼイネップが解説している。

……（彼らは）母をムスリムにしたんです。アルメニア人であるとわかっていたからでしょうね。だからこそ、名前を改名させたのです。母からもよく聞かされましたよ。12歳で宗教指導者の前で信仰告白した、って。<sup>31</sup>

その後さらに2度結婚し、三人の子をもうけた（長男は死亡）。長女ハティジェ（1959年生まれ・父イフサン）と、次女ゼイネップ（1963年生まれ、父ナーズム）がインタビューに応じて証言しているが、とりわけゼイネップが母親の身元調査に積極的だった。しかし、ゼイネップは2012年に出版された『行方不明の女兒たち』では氏名を伏せてい

---

<sup>30</sup> Nzahat Gündoğan, Kazım Gündoğan, *op.cit.*, p.522.

<sup>31</sup> Kazım Gündoğan, *op.cit.*, p.75.

た。2016年に出版された『修道士の孫たち』では写真も名前も出しているの、数年の間心境の変化があったのだろう。アルメニア人であること、デルスィムについて語ること、そのことはトルコでは人を不安にさせることなのだ<sup>32</sup>。この娘たちの証言がなかったら、アスルハンの「小説のような人生」を整理するのは難しかっただろう。

それから、診療所が出来たの。私は診療所に入った（働いた）。ハジュ（夫の通称）は死んだ。私は診療所から出た（辞めた）。コンヤに来た。私を育てた人たちの親戚が多いからって理由。<sup>33</sup>

アスルハンの話し方は、yavrum でときどき「調整」が入りながら、基本的にブツ切れである。それは、母語による自己表現を学ぶ機会もなければ、学校でトルコ語を習得する機会もなかったことに起因しているのだろうか？

デルスィムから来たとき何語を話していたのか？ ちっとも覚えてないわ。クルド語だったのかしら？ 全く記憶にないのよ。<sup>34</sup>

アスルハンは自称「クルド人」だった。ところが、下の娘のゼイネップが母親を養うことになった際、戸籍を調べてわかったのは、アスルハンの両親の名前が、父親が Agop、母親が Havves である、ということだった。Agop といったら、アルメニア人の名前ということとはゼイネップにはわかった。そして、ゼイネップは粘り強く調査して、実はこの Agop が、デルスィムのヴァンク村の有力な修道士だったということを見つけた。

虐待され差別され、尊厳を奪われてきたように見受けられるアスルハンの人生だが、アスルハンは養父母に感謝している。一方、娘のゼイネップにとって、そんなものは「養う」とか「育てる」ということにはあたらない、という譲れない思いがある。

虐待されていたんです、でも、母はそれを称賛と共に語るんですよ。私、どう

---

<sup>32</sup> 例えば、2009年に出版された、『孫たち』という本がある。(Ayşe Gül Altınay, Fethiye Çetin, *Torunlar*, Metis Yayınları, 2009) アルメニア人の出自であることを隠していた祖母を持つ25人の孫たちの証言集である。著者たちはまえがきで、証言を寄せてくれたひとたちの「証言することそれ自体」の困難さと、書籍化への抵抗にあったことを語っている。

<sup>33</sup> Nezahat Gündoğan, Kazım Gündoğan, *op.cit.*, p.526.

<sup>34</sup> *Ibid.*, p.528.

してもこのことを母にわからせることができないんです。<sup>35</sup>

ごく幼い子供に料理や掃除をさせることはゼイネップにとって育てることにはあたらない。しかし、料理や掃除ができたからこそ、首尾よく生き延びることができた、生きるための知恵をつけてもらったとアスルハン語る。ひとりぼっちのアスルハンが一日一日を生き抜くために作り出した世界を、その認識は間違っている、などと、どうして言うことができるだろう。

ゼイネップは母親の肉親捜しに奔走する。その中で親族ではないかという人物と電話がつながり、母親を電話口に出させたときに、はじめて母親に姉がいたことを知る。

母が電話の向こうの相手に「ザルタル姉さんは生きていますか?」と言ったんです。初めてそんな名前を聞いて、その場にいた者全員に衝撃が走りました。<sup>36</sup>

ザルタル姉さんは生きてはいなかった。しかし、姉の子供たちとの邂逅は叶った。アスルハンにとっては亡くなった長男にそっくりな姉の息子。ザルタル姉さんの息子にとっては亡くなった母、ザルタルにそっくりな母の妹。いとこたち同士で母たちの故郷を訪ねる旅も実現させた。こうして、デルスィムの物語は、娘、息子、その子らの世代へと繋がっていく。

#### IV. 尊厳の物語へ

ここで取り上げた人たちは、母語を忘れていどころか、母語がなんだったのかも覚えてすらいない人もいる。娘や息子の流暢なトルコ語による証言を読むと、母親の証言とのコントラストが、とるにたらないもののように捨てられた彼女たちの母語の存在を想起させる。

アスルハン・キレミッチヤンだけでなく、自らの人生を「小説のようだ」と表現したデルスィムの女兒が他にもいる。自分が目にした恐ろしい光景、苦難の日々、そんなことが事実であると、誰が信じるというのか? 誰もが最初、重く口を閉ざしたのは、そんな不安かもしれない。「誰が私の経験を理解するだろう」と。

---

<sup>35</sup> Kazım Gündoğan, *op.cit.*, p.74.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p.70.

標準的なトルコ語がうまく話せるかどうか、ということは、トルコ社会の中での相対的な立ち位置を決める要素となる。「トルコ語も満足に話せない連中」、そんな言葉を1999年から2001年の間にトルコに住んでいた頃、筆者は何度も耳にしたことがある。トルコ語を母語としない者たちへの蔑みの言葉を、女兒たちは幾度となく浴びてきたことだろう。

ギュンドアンらの作品は、これらの女兒たちの語りを否定もせず飾りもせず介入もせず作品とし、なおかつ、子どもたちの証言を盛り込むことで母との関係性を書き込んだ。子らにとって自分が何不自由なく操っている祖国の言語であるトルコ語は、母国語ではあっても母語ではなかった。母自身もまた、母語を持たない。母語不在のまま、母の拙いトルコ語と子の流暢なトルコ語の間を行ったり来たりしながら、読者はトルコ語で本を読む。

国の目指す「理想の祖国」<sup>ワタン</sup>のためにデルスィムという故郷<sup>ワタン</sup>を追われ、トルコにおける「唯一の言語」であるトルコ語で自らの半生を語った女兒たちの証言を読むと、そこには確かに筆舌に尽くしがたい（という言葉が陳腐に聞こえるほどの）経験があったに違いない。ルーツを重んじ、親戚縁者との関係性が濃厚なトルコ社会で根なし草のように生きながら、他者の言語であるトルコ語を身に着けて生きてきた。それは、国家の側から見れば、「理想のワタン」という物語の中の一つのストーリーかもしれない。一方で、女兒は今こうして、（言語がなんであれ）自らの物語を語った。そのことが、トルコ社会でどれほど勇気を必要とすることか、本稿で紹介した女兒の証言によって、少しは表現されているだろうか。語られたという事実、それ自体がすでに、国家によって押し付けられた「理想のワタン」、あるいは、大文字のワタンの解体作業のはじまりである。証言に耳を傾け、読み、行動する人々、とりわけ女兒の子らの存在は、傷ついてきた人々の尊厳回復なしには築くことのできない、生きる現場としての小文字のワタンの基礎工事の始まりを告げているのかもしれない。

人から軽んじられて生きてきたことを恥じ入り、出自を隠し、恐怖にかられて沈黙してきた人たちの勇気ある語りを受けて、戸惑いながらも周囲の人々は徐々に変化していく。子や孫の世代が調査に乗り出し、母の故郷を訪れ、司法手続きのために尽力し、周囲の人々に自分と家族のストーリーを語っていく。はじめは氏名を公開しなかったアスルハンの娘ゼイネップは言う、「母がアルメニア人であることを誇りに思います」と、そして、「私たちがアルメニア人であることを誇りに思います」と。